中間発表

チームとしての学校の実現に向けて
―学部学年の取り組みを通したチームづくり―

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科高度教職実践専攻
神奈川県立えびな支援学校
木部　美和子

1. はじめに

平成 27 年 12 月中教審答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」では、「チームとしての学校」を実現するために、専門性に基づくチーム体制の構築や、教員一人一人が力を発揮できる環境の整備を具体的な改善方策として挙げている。

開校２年目の現任校においては、チーム学校づくりとして、７つのプロジェクト研究チームを立ち上げ、すべての研究内容を学部に持ち帰り共有できるよう体制を組んでいる。このことは、結果としてすべての研究に教員がかかわり、全員で学校をつくっていることになる。しかし、研究はあくまで手段であり、研究のためではなく子どもの成長を支えるためにある。日常的に子どもを中心とした授業改善を行うことや支援の在り方を考えることの積み重ねがまさに研究であり、それを周りと共有し高めていくことが現任校が目指すチーム力であると捉えている。

2．学校の課題と研究の目的

学校の課題として、研究チームで提案されたことが、学部や学年で実践に活かされにくいといった現状がある。それは、各研究チームの担当者任せになっていることや、学年で話し合う機会が少ないためである。学校の中心にいるのは常に子どもである。その成長を支えるためにできることは何かということを教員間で話し合うことが重要である。

そこで、本研究では、まずは学年・学級など小さな単位でチームづくりに取り組むことを考えた。学年・学級で、個別教育計画のプロジェクトに焦点を当てた話し合いの機会を設定し、子どもを中心とした話し合いが日常的に行われることを目指したい。さらに、チーム学校の捉えとして、先行研究では学校のマネジメントを強化することだけでなく、「重要なことは教職員の「開かれた同僚性」を整えることではないか」と白岩（2016.10）は言っている。また、村松（2015）は「若手、中堅、ベテランそれぞれの教員がコミュニケーションをとることがチーム力を高めることにつながった」としている。以上の先行研究より、現任校でのチーム学年・学級づくりにおいて教員間の同僚性を生かした話し合いが行われるよう取り組み、学年で子どもたち一人ひとりの成長を支えることができるための提案をしていく。

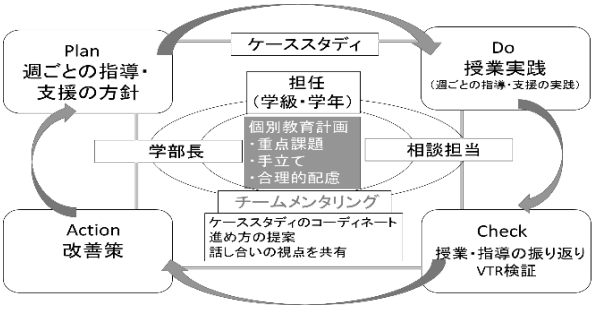
3．方法

3－1　質問紙による調査

調査対象：知的障害教育部門中学部教員 28 名
内容：子どもに関する話し合いの深まり、個別教育計画の共通理解などについて

3－2　ケーススタディの設定（図１）

週に１回設定し、個別教育計画をもとに、授業や日々の指導で子どもの見方やかかわり方について振り返り、改善を図る場面でチームメンタリングを行う。



「図１ケーススタディの方法」

4．予想される成果

ケーススタディでの話し合いがきっかけとなり、子どものかかわり方や成長の様子を学年や学級で話し合う機会が増えると考える。この取り組みが他学年他学部にも広がり、子どもを中心とした話し合いが学部内で活性化されるようになることを目指している。

【先行研究・参考文献】

白岩博明（2016.10）「「開かれた同僚性」を考える―「チームとしての学校」の理念によせて―」
村松潤（2015.3）「チームとしての学校」を支える中堅教員の資質や能力―中堅教員研修を活かした校内の実践を通して―教育実践高度化専攻成果報告書抄録
文部科学省中教審答申（2016.12）「チームとしての学校の在り方について」